

WaBuB PFM News

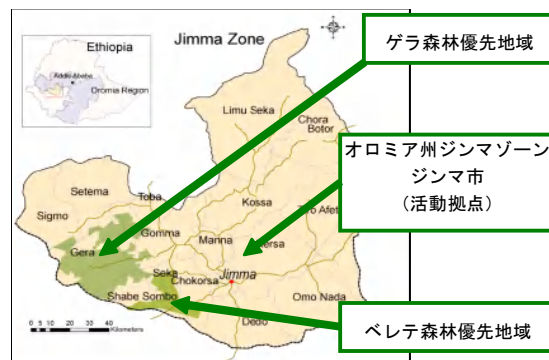
~Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management~



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2008年2月1日発行 (第14号)



森林コーヒーはいかが？

エチオピアには、幾つかコーヒーの生産地があります。日本でも有名なのは、ハラル、シダモ、イルガチャフェあたりでしょうか。どれもアラビカ種ですが、気候などの影響により、産地によって若干味が違うようです。先日、南部イルガチャフェを訪れた機会にコーヒーを試したところ、ジンマで慣れているコーヒーに比べて、非常に味がマイルドなのに驚きました。日本人には受けそうな味ですが、普段、コクの強いジンマ産に慣れていると少し物足りない気がしました。これまでベレテ・ゲラの森林コーヒーは、ジンマなど地方都市の工場に集められ、他の地域で農薬なども使用したプランテーションなどで生産されたコーヒーと混ぜられて、ジンマ産として出荷されています。せっかく国際認証も取得したので、ベレテ・ゲラ独自のブランドとして出荷できないかと、現在、模索しているところです。今回、その最初の取り組みとして、エチオピア国内での農業祭に「WaBuB 森林コーヒー」を出展しました。まずは、その農業祭の様子からご紹介します。

祝 完売！ WaBuB 森林コーヒー



「おいらの生産したコーヒーを、エチオピア中に宣伝するのじゃ！」と、ベレテ・ゲラから WaBuB の代表である 8 名の村人が、南部の都市アワサでの農業祭(1月12-14日)に参加しました。昨年からは開催されている農業祭では、エチオピア各地から農業関係の団体や企業などが参加し、自分たちが生産・開発した農産物や加工品を紹介しています。ベレテ・ゲラからは、JICA エチオピア事務所が取り組んでいる「一村一品」活動の一環として出展し、今回初めて「WaBuB 森林コーヒー」の紹介および販売を行いました。

コーヒーを並べた展示ブースに立つ村人達は、一張羅に身を包みながら、顔がこわばっています。「スマイル！スマイル！客が逃げてくよ！」と声をかけると、ニヤッと笑いますが、すぐにまた眉間にしわがよります。さすがに緊張しているのでしょう。村のマーケットで威勢をふるってきたけれども、アワサという都会に来るのも初めて、おまけに客はオロモ語を話さないエチオピア人の顔をした外国人！…どうしても田舎者丸出しです。「チャット(第7号参照)があれば、元気が出て売りまくるんだけどなあ…」と、どうも調子が出ません。「まあ、コーヒーでも飲んで元気を出せよ」と、発破を掛けると、試飲用のコーヒーをグビグビと飲んでくつろいでいます。



コーヒーを紹介する村人達



コーヒーセレモニーでおもてなし！

コーヒーでようやく緊張が解けたか、それとも「農業副大臣が視察に来ている！」の声にびびったのか、ようやく販売に身が入ってきました。「どこで生産しているの？」「どんなプロジェクトをしているの？」といった訪問者からの質問に、ポスターを示しながら答えます。ぼちぼち要領を得てきたか、この調子なら副大臣の視察も大丈夫だ！しかし、いざ副大臣が隣のブースに来ると、村人達は逃げ出した！どこへ行ったんだ！？それでも、リーダー格であるチャフェ WaBuB 代表フセイン長老は、逃げ出さずに威風堂々と顔をこわばらせている。さすがだ！目の前に来た副大臣の短い質問に、何やら答えた。えらいぞ！あとで聞いてみると、「この森林コーヒーを売って、生活がよくなったか？」の問いに、「もちろんです！」と返したとのこと。このコーヒーを売るのは今回が初めてのはずですが、まあ近い将来に現実に行きましょう。

副大臣にも好印象を持ってもらえたおかげか「WaBuB 森林コーヒー」は飛ぶように売れていきました。500g入りパックを12ブル(約170円。ジンマ市内では通常10ブル)で販売しましたが、用意した250パックは3日間で完売しました。村人達もやはり誇らしげです。また、何よりも村人達が驚いたのが、アワサまでの約8時間の道のりだったようです。森林に囲まれた自分達の土地とは著しく異なり、乾いた荒地が延々と続く。道端の井戸には、気の遠くなるような行列が順番を待っている。「森が無くなれば、おいらの村もこうなってしまうのか…？」と、深刻な顔で車窓に流れる風景を眺めます。村人が誇りを持って森を守り、末永く森と生きていけるよう共に取り組んでいきます。



副大臣の群衆に囲まれるフセイン長老

WaBuB は、現地オロモ語で(地域住民により組織される)森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFM は、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

農民の学校 WFS -苗木の種をまきました-

～ベレテ森林ハネ・ドウオ村 モハメ普及員の WFS～

11 週目に入ったモハメ普及員の WFS では、すでに苗床作りが終わり、今日は苗木の種をまきます。メンバーが揃うと、早速苗畑へ移動します。サブグループ毎、4 つの苗床にそれぞれ種を植えます。まず等間隔に指で列を描き、丁寧に1つずつ種をまいていきます。この日は、セスパニアとグレビリアの木の種を植えました。それぞれ、24 時間水に浸した種と何もしていない種、苗床の表面に藁をかぶせたものと裸地のもの、というように処理・保育の方法を変えて、発芽率や成長の比較ができるようにします。



丁寧に種をまきます

メンバーのほぼ全員が、これまで作物を植えることはあっても、樹木の種をまくのは初めてです。急峻な山の上、2400mの高地に位置するこの村では小麦やトウモロコシなどの農耕が盛んで、森を切り開いて農地を広げてきました。2 年ほど前にようやくこの僻地に普及員が配置された時、農民の森林保全への意識はかなり低かったものの、WaBuB の取組と共に村長が率先して



小麦畑の向こうには、かろうじて森林が残っている

呼びかけ、いち早く森林と農地との境界が確定され、伐採に歯止めがかかったようです。しかし、「自分達が意識を高めても、山向こうの隣村から伐採が迫ってくるのを見るのは耐え難い…」と、村長は苦悩を抱えています。WaBuB を普及していかねば、残されたわずかな森が消えるのも時間の問題です。

～ゲラ森林コラ・スラジャ村 ザラカ普及員の WFS～

ザラカ普及員の WFS は13週目のセッションに入っており、苗床に植えた種の発芽状況の観察が行われていました。すでに種まきも終わり、少しずつ芽が出始めています。4つのサブグループに分かれ、「何本の芽が出ているか?」「土は乾きすぎているか?」「種が虫に食べられていないか?」を、実際に手を動かしながら調べます。その結果は、グループごとに紙に書いて表にまとめます。



発芽状況をじっくり観察

この表にまとめる作業が、なかなか難しいようです。このグループには、読み書きのできるメンバーが32人の中6人ほどいるようですが、今日は村内で集会が行われており、その多くが召集されてしまったようです。そのために文字を書けるメンバーが2人しかおらず、かなり時間がかかります。この表をまとめる作業を如何に簡潔にするか、例えば数字や絵だけで観察結果を伝えられるようにするなど、今後改良していく必要があります。



観察結果の発表

表にまとめた結果をグループ毎に発表し、観察の様子を共有します。どうしても文字を書ける男性が発表者になりがちですが、徐々に女性も自信を持って発言できるよう、簡単な識字教育を取り入れるなどして働きかけていく予定です。

森林コーヒーの買い付け (ゲラ森林)

ゲラ森林のアファロ集落で、1月18～19日にビジネス・パートナー契約を締結した輸出業者による森林コーヒーの一括買い付けが行なわれました。ゲラ集落の住民は、この日に合わせて、アファロまでの山道2時間の道



コーヒーの計量と袋詰めの際を、コーヒーが詰まった麻袋を馬に載せて運んできました。運ばれてきたコーヒーは、輸出業者による品質チェックが行なわれた後に、市場価格に対して25%のプレミアムを付加した価格で買い取られていきました(計218名の農民が支払いを受けました)。品質も同行した農業機関の研究者からお墨付きを得ることができました。ゲラ森林では、今年はコーヒーの不作が深刻で、農民達は期待していた収穫が確保できず、ちょっとがっかりしていましたが、「来年は2倍の収穫があるはず!」と、早くも次のシーズンに目を向けているようでした。来シーズン

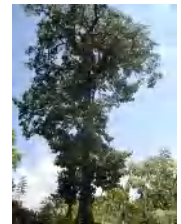


支払いを受ける農民

は、現在組織化中の新規 WaBuB も加わり、森林コーヒー認証を通じた生計向上支援活動も、ベレテ・ゲラ森林内の多くの村々に広がっていく予定です。

ベレテ・ゲラの有用樹種

Omo (*Prunus Africana*)



前号で紹介したポドと同じように、オモもオロミア州の法規により伐採が禁止されている樹種の1つです。アフリカの高地のみに自生し、エチオピア高地もその限られた生育地の1つです。独特の黒っぽい幹を持つ高木で、薪や建材だけでなく、伝統的に葉を絆創膏として、樹皮を腹痛薬として利用していたようですが、今はベレテ・ゲラ内でも見かけることは稀です。

エチオピア国内だけではなく、オモは国際的にも貴重な樹種です。70年代に、その樹皮の成分が前立腺障害に対する薬効があることがわかると、各地でオモの樹皮が剥ぎ取られ、高く売ることができました。樹木は幹の内部は木質化し、外側の樹皮の部分で養分を循環させているため、樹皮を一回り剥いでしまうと養分循環が絶たれ、枯れてしまいます。そのために、カメルーンやマダガスカルでは、ほぼ絶滅に近い状況となりました。今では、「絶滅のおそれのある野生動物の種の取引に関する条約(CITES)」のリストにも登録され、過度の利用には歯止めがかかっています。

しかし、ポドと同じように、一旦、数が減ってしまうと、自然での繁殖はかなり困難です。今残っている成木・老木が枯れてしまえば、オモは森から無くなっていきます。ポドやオモといった在来種の計画的な植樹・保護が必要ですが、エチオピア国内では、成長が早く利用価値の高いマツやユーカリなどの外来種が好んで植えられる傾向があり、確実に森の質(特に多様性の観点から)は落ちてきていると危惧しています。

発行元:ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2 ニュースレターやプロジェクトへのご意見・ご感想もお待ちしております。

E-mail: belete-gera@ethionet.et (担当:西村、吉倉)

URL: <http://project.jica.go.jp/ethiopia/0604584/>